

# 価値観反映 変わる供養の形

お盆の時期を迎えた。住宅事情や家族構成の変化で「供養」の形は徐々に変わってきている。それぞれの価値観を大切にしようという動きもある。最近の供養事情を探った。

## ●仏壇 小型サイズに

東京都大田区の順子さん(47)「仮名」は昨年7月、母(82)を突然の病で見送った。問題となったのが仏壇。実家の昔ながらの仏壇は大きすぎて自宅に入らない。夫(51)と近くの仏具店に向き、仏壇を入れ替える方法を教えてもらった。位牌を一つにまとめ「纏り出し位牌」にし、一周忌の際、新しい仏壇に「魂入れ」をしてもらった。

順子さんが買い求めたのは小型ながらも従来の仏壇に近いオブジェのような「祈り壇」が店頭で並ぶ。数年前に登場して以来、デザインのバリエーションは増える一方だ。

冠婚葬祭互助会「くらしの友」の阿部慎太郎さんは「手を合わせる」と癒やされる。宗教感は薄れても、「祈りの場」は必要とされています」と分析する。系列仏壇店では今も

20万〜40万円の「家具調仏壇」が主流だが、客の1割程度は4万〜8万円の祈り壇を選ぶという。若い世代はもちろん、施設の個室に入る高齢者にも好評で、今後ますます需要が増えそうだ。

順子さんの父はすでに墓に入っている。母は生前、「順子に墓守をさせるのはかわいそう」と、父の家の墓に入ることを拒んでいた。現在、母の遺骨は近所の寺に預けてあり、いずれ父と併せて永代供養してもらおうつもりという。

## ●人気集まる樹木葬

一方で、「墓に意義を見いだせない」という人も増え、野山への散骨や海洋葬といった「自然葬」が人気を集めている。そのひとつに「樹木葬」がある。

7月末の京都。祇園に近い建仁寺西院で、樹木葬の説明会が開かれていた。照りつける日差しの中、墓地の奥にある樹木葬地だけは驚くほど涼しい。イチヨウの木のたもとに現在、40人ほどが眠る。墓石の代わりに木が墓標となる。副住職の伊藤東凌さんは「自然に返り、皆がつながる」ということを理解してもらえればどなたでも」。禅宗の寺だが、樹木葬に宗派は問わないという。

## ●遺骨 手元に置き

建仁寺や大徳寺など京都の4寺院で樹木葬をプロデュースしているNPO「手元供養協会」の山崎譲二さん(65)によると、故人の遺骨や遺灰を身近に置く「手元供養」も、じわじわと広がっている。2002年に山崎さんが提唱し始め、ペンダントやオブジェに納める業務にはさまざまなメーカーも参入し、この10年で事業規模が約15倍になったという。

「先祖代々」の墓が遠方にあっても、頻りに供養に通うのは難しい。結婚相手の先祖だからといって、直接つながりのない一族の墓に入ることには違和感を覚える人もいる。交通の便がよい墓地を新規に購入するには高額の費用がかかる。新たに墓を建てると、最低でも100万円程度は必要になる。遺骨や遺灰を自宅ですのまま保管すれば費用はかからない。故人を常に近くに感じられる精神的メリットもある。

遺骨や遺灰の一部をペンダントやオブジェに納める手元供養の場合、費用は数万円から。山崎さんは、残りを納める先として樹木葬を提案している。自身も事務所の机の一角にメモリアルコーナーを作り、両親の写真と遺骨入りの地蔵オブジェ、好きだったたばこを供える。「親に感謝するために作ったのですが、今ではこちらが支えられています。大事なのは故人を敬い、感謝し、供養するという心。それを忘れなければ、自由に供養の形を選べばいいと思う。見えや世間体は必要ないのでは」と話す。



①建仁寺の樹木葬地「緑雲苑」の石碑には、埋葬された人の氏名が刻まれている＝京都市東山区で②③「手元供養」の一例。遺骨を納めた地蔵のオブジェは清水焼で、ひとつひとつ顔の表情が違う＝京都市中京区のNPO「手元供養協会」で④⑤仏壇店の店頭には、従来の仏壇に加え、モダンなデザインの「祈り壇」が並ぶ＝東京都大田区で